

## 近代（明治～昭和初期）の服飾 — 都市風俗の変化と着物文様の変遷

### まえがき

古い着物……。古着と一言で片付けられてしまいそうなイメージがありますが、日本人の民俗衣装である着物には現在にまで至る長い歴史の中で、その時代を生きる人々の支持による流行に左右されながら、多様な好みを反映して変容してきました。しかし残念ながら染織品の寿命は短く、絹はおよそ100年程度を境に急激に脆弱になってしまう傾向があります。ですので、明治時代以前の作品が完全な形で残ることは多くありません（絹に比べて木綿、麻といった植物繊維は比較的年月が経っても丈夫です）。その希少価値的な側面もあり、100年以上の時代を経た染織品を「古代裂」と総称しています。

また、それ以降につくられた着物は、太平洋戦争を境目として戦争前（大正時代から昭和初期）につくられたものを「アンティーク」、それ以後につくられたものを「リサイクル」とに分類をしています。戦前と戦後では素材のクオリティ、色柄・文様などに大きな違いがみられるからです。しかしこれは広く世間一般に通じている訳ではなく、また、はっきりとした定義もないので、着物業界、特に時代衣装を扱うものの中ではそのように認識されているとお考え下さい。

今回このようなレポートを作成することになったきっかけは、ある和服専門学校からのアンティーク着物をテーマにした講義の依頼でした。商売柄アンティーク着物をはじめ、古い染織品を十数年あつかってききましたが、この時代の着物のバラエティーの豊かさには今でも驚かされてばかりです。日本の服飾史史上、着物が一番輝いていた時代（私はそう思います）、そんなアンティーク着物が創りだされた背景を、これを機会に改めて考えてみようと思いました。

私見も多く含まれておりますが、ご興味のある方々にご覧いただき、少しでも何かのお役に立てれば誠に幸いです。

2011年8月改訂 古代裂今昔西村 西村秀一

### （参考文献）

日本ビジュアル生活史 「江戸のきものと衣生活」 丸山伸彦 編著 小学館  
図説「着物の歴史」 橋本澄子 編 河出書房新社  
NHK知るを楽しむ 歴史に好奇心 '07 2月3月号 日本放送出版協会  
週刊 YEAR BOOK 日録20世紀1868（明治元）年～1945（昭和20）年 講談社  
朝日クロニカル 週刊20世紀1901（明治34）年～1945（昭和20）年 朝日新聞社  
決定版 昭和史 1：「昭和前史・文明開化」～7：「二・二六事件前後」 毎日新聞社  
日本歴史シリーズ20 「大正デモクラシー」 世界文化社  
グラフィックカラー昭和史10 「風俗と世相」 研秀出版

（※サンプル作品は全て当社所蔵、参考画像は全て出所を明示しました。）

## 目次

### ページ

2～4	男性の洋装化	何を着るのかという対応に男女差
5～8	サンプル作品	明治時代中頃までの着物
8～10	女学生の袴姿	女性の社会進出が生まれる過程
10～12	サンプル作品	明治時代中頃～大正時代の着物
12～13	モダン都市の形成・モダンガールの誕生	ライフスタイルの変化
14～16	サンプル作品	大正ロマン、昭和モダン
16～17	洋装化への波 そして現代へ	生き残りをかけた戦い 古いものから学ぶもの
18～24	参考画像	

### 男性の洋装化

明治時代になって日本の服飾の歴史史上、とても重大な転換期が訪れました。それは何でしょう？洋装が一般に普及していくということです。戦国時代、織田信長が南蛮人から手に入れた洋服を着て、安土城の天守閣でワインを飲んでいたという話。さらに時代が下って、江戸時代も後期になると洋服姿がちらほら見られるようになりますが、まだまだ極一部の権力者に限られたこととして例外とします。

和装の服飾形式が確立されたのが平安時代の頃といいますからそれ以来、明治時代を迎えるまで、人々が着るものといえば着物「和服」しかありませんでした。しかし、人々は洋服という今迄ふれたことの無い、全く新しい衣服に出会うわけです。

明治維新を迎えた日本は、鎖国をしていた遅れを取り戻そうと政府主導で欧米化を目指します、先ずそこで男性の洋装化が始まりました。明治4年(1871年)に官吏や軍隊、郵便や鉄道といった国がつくった組織や会社などで働く人達の仕事服として、洋服が採用されたのでした。社会に出て働く男性は出勤する時に和装から洋装へ着替え、家へ帰るとまた和装に着替え直しました。・・・、わかりますか？今の世の中とは全く逆の発想で考えて下さい。

当時の社会学を理解する上で、その時々時代の背景を念頭に置くということが重要です。現在の常識で考えてしまうと見誤ることが多々あります。今まで着物しか着なかった当時の人々にとっては、着慣れている着物の方が洋服より落ち着くという理解をして下さい。

その結果、男性にとっての和装は、普段着やくつろぎ着、もしくは伝統的な行事やセレモニーといった礼装用かのどちらかという二極化になっていくのでした。



← 明治13年神戸税関職員

幕府が神戸の外人居留地に設けた運上所は明治政府が引き継ぎ、明治4年に税関と改称した。

(決定版 昭和史 1:「昭和前史・文明開化」毎日新聞社 P.191)



← 北海道幌内鉄道は明治13年の札幌―手宮(小樽)間の開業にあたって、米ポーター社から蒸気機関車8両を輸入。「弁慶号」「義経号」「静号」などと名づけた。画像は弁慶号の試運転記念。

(決定版昭和史 1:「昭和前史・文明開化」毎日新聞社 P.158)

対しまして女性の場合はどうだったのでしょうか？この時代、女性はまだ社会に出て働くということがありませんでしたので、男性と同じように並んで洋装化という様にはいきませんでした。これもまた例外と考えて欲しいのは、先行して始まる皇族、華族女性の洋装化。特に鹿鳴館時代の様子は目に浮かぶことでしょう。これも、極一部の上流階級の人達のものとして例外とします。

だんだんと男性と女性では、何を着るのか、ということへの対応に差ができていくのでした。

このような服飾観念がよくわかる漫画があります。何だかわかりますか？長寿アニメ番組、そう、『サザエさん』です。ちょっと思い出してみてください。

サザエさんのお母さん、フネさんは、外出のときでも家に居るときでも大抵着物姿ですが、お父さんの波平さんは、会社に勤めに出ている時は洋服、家に帰ると、着物に着替えます。隣の家の伊佐坂先生夫妻も、家にいる時は着物姿です。フネさんや波平さん達は、着物が普段着なのです。みなさんの中でも、うちのおばあちゃんやひいおばあちゃんは、ほとんど着物で暮らしてたよ！という方もあるでしょう。洋服より着物の方が落ち着くという世代ですね。

このアニメ『サザエさん』の原作は昭和 21 年に新聞に連載されたのがはじまりで、何年経ってもサザエさんは 24 歳、カツオは小学校 5 年生のままです。作者、長谷川町子さんは大正 9 年（1920 年）生まれ。ちょうど着物から洋服への過渡期を過ごした背景が作品にあらわれているのです。

若夫婦のサザエさんとマスオさん、そしてカツオ、ワカメ、タラちゃんといった子供たちは洋服ばかりで過ごしています。サザエさん、マスオさん世代は、幼少の頃は着物を着せられて過ごしたのかもしれませんが、物心ついた頃からは洋服での生活が多くなった世代です。しかし、サザエさんも七五三のような行事の時には、着物を着ます。

これは普段は洋服でも、晴れの時に和服を着ることがあるという現代の服飾観念と同じです。婚礼のような儀式の場で、女性は和装なのに男性はモーニングといった、良く考えると大変アンバランスな組み合わせが見られるのは、先に男性の洋装化が進んだことによって同じ日本人なのに男性と女性では、何を着るのかということへの対応に差ができたからなのです。そして、いつの間にか着物は女性のものだという概念も強まっていくことになりました。

ただ、男性の洋装化が明治時代に入ると、みんながみんな一気に進んだという訳ではありません。特に都市部と農村部という地域差は歴然としていました。また所得水準などの格差によっても普及の速度に差がありました。

時代背景が現代とは全く異なるので、なかなかピンとこないかもしれませんが、明治 41 年（1908 年）の時点で専業農家率が約 69.3% というデータがあります。驚きですね。日本の全世帯の約 7 割が農業だけの収入で暮らしていたということです。農業以外に、第一次産業といわれる林業、水産業などの世帯も入れると当時のサラリーマンの世帯はほんの僅かになり、そして、それら僅かなサラリーマンの人々は都市部に集中していました。

農林水産業といった第一次産業で生活をしている人達には洋服は取り急ぎ必要なものではありません。ですからサラリーマンの人々が集中していた、大都市圏を中心に先行して進んだ都市風俗だという捕らえ方をして下さい。そしてそれが、周辺都市、農村部へと徐々に波及していったと考えて下さい。この後に続く、大正のおわりから昭和にかけて進んでいく女性の洋装化にも同じくいえることです。

□サンプル作品 明治時代中頃までの着物



(01・02) 幕末から明治初期頃の振袖ですが、どう思いますか？これが振袖？未婚の娘さんが着るものですよ！かなり渋いですよね。柄もこんなに小さく、近づいて見ないと何の模様かわかりません。

この頃の着物は江戸時代のおわり（幕末）からの流れを引き継いだ地味なトーンのものが主流です。なんでこんなに地味なのでしょう？それは江戸時代の半ばを過ぎた頃から既に地味化への傾向は始まっていました。

江戸時代というのはそれまでの長い戦乱期（戦国時代）から解放された平和な時代でした。そして、経済成長とともに力をつけた町人の文化が開花しました。着物も豪華で華やかなものがたくさん作られましたが、だんだん幕府の政策が厳しくなっていきます。質素儉約のもと奢侈禁止令が頻繁に発せられます。

そのような度重なる奢侈禁止令から人々は「粹」という美意識を追求するようになり、縞や小紋という柄行が好まれるようになります。小紋といえば、みなさんの頭の中には”やわらかもの”のお洒落着が浮かんでくるのではないのでしょうか？「訪問着」「付け下げ」「小紋」といった分類上の小紋ではなく、このようなものです。



(03) 細かな文様を彫り込んだ型紙に糊を置いて引き染めをする技法上の小紋です。大変細かい文様なので型のおくりの難しさ、糊が目詰まりしやすいことなどから型染の中でも最も難易度の高い技術が必要です。

これも幕末頃の作品。裾には実に繊細な友禅染が施され小紋だけでも手がかかるのに、友禅染との併用は更に手が込んでいます。度重なる奢侈禁止令は見た目の豪華さを競うのではなく、いかに目立たない様に手の込んだものを作るかという屈折した美学を生むのです。

このような奢侈禁止令がもたらした影響に、様々な内外の政情不安がプラスされます。黒船来航、安政の大獄、桜田門外の変、尊王攘夷などの幕末の動乱による暗い世相が着物の色目にも反映されたようです。

それともう一つ江戸期に起こった現象で説明しておかなければならないことがあります。それは、帯の幅が現代のように幅広になったということです。江戸時代の17世紀の終わり頃（1600年代のおわり、元禄の頃）から変化していきました。それまでは二寸五分（9.5cm）から三寸（11.4cm）くらいだった帯幅がこの頃からだんだん広くなって、約一世紀の間に一尺（37.9cm）のものまで見られるようになったといえますから大変な変わり様です。ちなみに現代の帯幅は八寸（30.3cm）が標準、明治期の丸帯に九寸（34.1cm）程のものも見られるので、一尺とまではいきませんが幅広のまま現在に至っていると言えます。

では、帯が幅広になったことは着物にどんな影響を及ぼしたのでしょうか？元々帯というものは小袖を安定させる為のベルト（小袖にとって脇役）であったものが、いつのまにか装飾性を持って主役の小袖と張り合うようになったのです。脇役の時の帯は無地か柄があってもほとんど目立たないものだったのに、文様を持って主張してきたのです。

そしてそれがやがて逆転します。幅広の文様帯で華やかに結ぶようになると、着物全体に付けられていた模様は裾の方へ後退していきます。（01～03）がそうですね。（01・02）振袖は未婚者の礼装用ですが、既婚者の礼装用の着物も見てください。

04



04



（04）このように柄が追いやられて、裾模様という柄付けが生まれました。このような柄付け、現在でもみえますね。そう、これが現在の留袖に繋がっている訳です。そして模様の後退はこれではおさまりません。ついには次のような下前模様（05）。下前だけに柄が付いて、歩くとチラチラ模様が見えるというもの。



そしてついには、究極の裏模様 (06)。脱がなければわからないというもので出現しました。このように江戸期におこった帯幅の変化は着物の文様付けにこのような影響を与えました。



さて、明治も中頃になってくると (07) 振袖はこのように柄が少し大きくなり地色もやや明るくなってきますが、それでもまだ地味ですね……。模様は相変わらず裾の方へ追いやられています。このような振袖 (01・02・07) に一体、どんな帯を合わせたの?とみなさん思われることでしょう。ちなみにこんな感じです (08)……。帯もかなりキテますね。両面全通で織られた渋いトーンの丸帯が当時の主流でした。



この時代の絹の染物（やわらかもの）は、こういった紋の付いた礼装用の着物がほとんどでした。普段に着ていた着物は、ほとんどが木綿。絹ものを着ることができた裕福な人でも地味な綿織物でした。誰もかも、何もかも、みんな、渋〜い装いであったのが明治時代中頃までの特色です。

## 女学生の袴姿

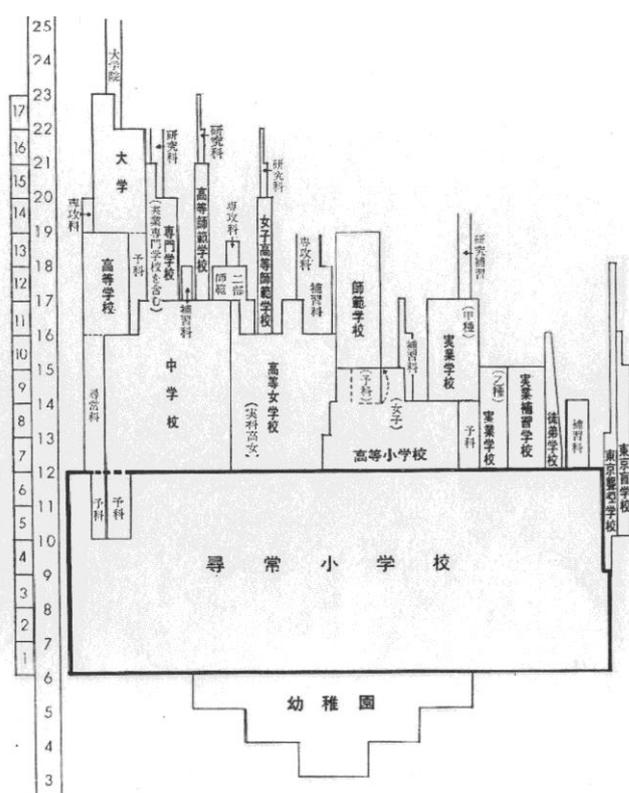
男性の装いが公的に洋装化していったのに対して、明治期の女性にみられた社会的な新しい出来事として、女学生に袴の着用を政府が認めたということが挙げられます。（現代の女子学生のなかに、卒業式に袴を穿く人があるのは、この頃（明治〜昭和のはじめ）にかけての女学生の袴姿を真似たものなのです）。女性が袴を穿くようになったきっかけは、女子が学校に行きはじめたからでした。椅子に座って授業を受ける際に着流しの着物では裾が乱れやすいという問題がおこったからです。

しかし当時は、女性用の袴はなかったので男袴が採用されました。袴というのは、江戸時代、武士の公式的な服装でしたので、時代が明治にかわって武士という階級が無くなっても、一般には袴は男性のものだというイメージが強かったのでしょうか、なかなかこれが定着しませんでした。それはそうですよね。当時の女性が袴を穿くということは、男性がスカートを穿いているようなものです。さすがに、着る方もそれを見る方もかなりの抵抗があったのでしょうか……。政府の方針も二転三転しながら、ようやく女学生の袴姿が定着するようになるのは明治30年（1897年）頃で、宮中の女官（にょかん）の切り袴をもとに作られたといわれる女袴に海老茶色を用いた所、全国の女学校がこれを採用していきました（※補足1）。またこの頃から髪形も、不衛生であるとされた江戸時代以来の島田髷等の結髪（日本髪）に代わって、西洋風の束髪が多数を占めていきます。この束髪に海老茶袴の女学生スタイルは、紫式部をもじって「海老茶式部」と呼ばれていたそうです。



← 小杉天外「魔風恋風」の単行本（春陽堂 1903 年刊）の口絵  
（朝日クロニクル週刊 20 世紀 1901 朝日新聞社 P.36）

ちょっとここでこの頃の学校制度をみてみましょう。今、話に出てきている女学生というのは高等女学校に通う12歳～17歳の少女のことです。当時の義務教育は男女とも6年間の尋常小学校。その後の進路は、本人の学力、親の経済力、男女の違いなどによって別れました。尋常小学校での義務教育を終えたのち、成績優秀な男子は中学校(旧制中学)へ進み、その後専門学校へ進学したり、高等学校(旧制の高等学校)等を経て大学を目指したりしました。一方、成績優秀な女子は男子の旧制中学校に相当する高等女学校へ進学しました。しかし、女性は江戸期からの封建的な考え方「女性には学問は必要なく、家を守っていればよい」という考えが明治、大正では多く残っていましたので、高等女学校に進学できたのは、ほんの極一部の人でした。教養があり且つ家計的にも恵まれないといけなかった女学生。それは文明開化によって生まれた新たな女性像として注目を集めました。



大正4年(1915)の中等教育機関(旧制中学校、高等女学校、その他学校含む)への進学率は、男子10.8%、女子5.0%、大正9年(1920)では、男子19.7%、女子11.5%でした。

時代が進むにつれ、中等教育機関への進学率は増加しますが、それでも昭和15年(1940)時点で男子28.0%、女子22.0%であり、中学校や高等女学校へ進学できたのは、ごく一部の青少年少女に限られました。

← 大正8年の学校系統図

『学制百年史 資料編』  
 文部省編：東京 帝国地方行政学会  
 1972【FB14-65】より

海老茶袴のスタイルが見慣れ出した明治32年(1899年)に、「高等女学校令」が施行され道府県に最低一校の高等女学校設置義務が決められると、少しずつ進学率は増加していきます。もともと女学校教育とは良妻賢母を作り上げるという目標のもとに、家事や和裁といった科目にも重きがおかれていましたが、その後の女学生の増加は社会に進出するエリート的な女性、今で言うキャリアウーマン的な存在までも輩出し、その女性達が服飾における大正ロマン・昭和モダンを先導するファッションリーダーを担うようになるのです。

(※補足1)

1885年(明治18年)に学習院女子部の前身である華族女学校、下田歌子校長が女袴を考え出したという説が多いようですが、1875年(明治8年)開校の跡見学校が当初から紫の袴を着用し、女学生袴をはじめ採用したとする説もあります。

その後の政府の方針が二転三転し、女学生袴が根付かなかった為(華族女学校の服装規定も、明治20年に洋服着用に限ると定めたり、明治22年には式日以外和服着袴可となるなど変遷しています)、実際の所はわかりません。

明治30年代には海老茶袴スタイルが女学生に完全に定着するようになりますが、それには、華族女学校で袴の色を海老茶に統一した所、全国の女学校がこれにならっていったという経緯があるようです。女学生は紫式部になぞらえて「海老茶式部」と呼ばれました。

ただ保守的立場をとる跡見学校は、明治35年の皇后陛下のお言葉(「婦人にはやはり緋の袴仕立にして、色は紫を用いたらよかろう」)を味方に付けて独自路線を守り、「海老茶式部」に対して「紫衛門」と呼ばれました。また、宝塚音楽学校の袴の色はくすんだ黄緑であったとのこと。他校で色々な色の袴がみられたかどうかはわかりませんが、おおむね海老茶色が多かったのではないかと考えています。

□サンプル作品 明治時代中頃～大正時代の着物



(11) 明治後期の振袖。先程の振袖(07)に比べて、また少し柄が大きくなりました。地色も明るくなって、そして何よりも色数が増えました。また、明治の後半から染め物の生地にも縮緬が多く使われるようになります。そして、大正時代に入ると、だいぶ明るくなります(12・13)。(13)は孔雀の模様とモダンな色使いが特徴的です。明治も半ばを過ぎると、暈しや明るい色の挿しを入れ、絵画調の友禅染が描かれたり、洋花をモチーフにした模様や伝統的な花柄を西洋風の色使いで用いたりする模様などが現れます。

またこの頃の振袖は、(12)のように、嫁ぐと袖を詰めて留袖にできるものや、(14)のように無地の替え袖に付け替えて留袖にできるものがみられます。当時の絹は貴重だったので、大事にされ、長く着られるように工夫されました。



次に夏の色留袖（15）。菖蒲の模様ですが、なんかちょっと変じゃないですか。角角したアール・デコ調で描かれています。対して（16）の散歩着はアール・ヌーヴォー調のモダンな菊の地に伝統和風的な菊が裾に配されて融合しています。

アール・ヌーヴォー、アール・デコは19世紀末から20世紀にヨーロッパで花開いた新しい装飾美術。そういった西洋趣味の影響も着物に取り入れられました。



だんだん昭和に近くなってきた頃の振袖はこちら（17）。だいぶ模様部分の面積が増えてきました。これも菊尽くしの文様。暈し染めをふんだんに使うことにより、伝統和風的な菊がメルヘンチックに仕上がっています。

はっきりとした定義は無いのですが、これらのように暈しを用いたやさしいトーンの色柄のものを“大正ロマン”の着物と呼んでいます。現代のものには見られない、独特な色使いが特色です。

では、あんなに地味だった着物の色柄が、なぜこんなに華やかに変わっていったのでしょうか？やはり世の中の世相によるところが大きいのでしょうか。日清戦争（明治27年）、日露戦争（明治37年）での勝利。特に日露戦争での勝利は、ちょうちん行列が練り歩く程のフィーバーぶり。着物には江戸時代の元禄模様がリバイバルされて流行りました。また、更にその後の第一次世界大戦が日本に軍需景気をもたらします。それら世相の明るさが、この時期の着物に多彩に反映して模様や色、技術や素材に新しい特徴が生まれるのでした。異国趣味の影響も受けながら大正ロマンという独特な雰囲気を作り上げていくのです。

#### モダン都市の形成 モダンガールの誕生

驚きのデータがあります。明治30年（1897年）の女子の小学校の就学率、50%。義務教育でも女子の半分は学校に行けてなかったんですね。それが明治45年・大正元年（1912年）には98%になり、ほぼ全員が小学校に行けるようになりました。女子の初等教育がこのように急速に普及したこともあり、大正時代に入ると次第に高等女学校へ通う女学生の数も増加していきます。

また、この大正時代というのは、大都市がモダン都市へと生まれ変わっていく時代でした。簡単にいうと今現在の私たちが営んでいる都市生活のスタイルに近づいていった時代です。電気照明が一般化し（それまでは街中の照明はガス灯でした）、自動車、飛行機などの新しい交通機関、電信電話による高速通信、ラジオ、映画などの新しいエンターテインメントが登場します。当時の人達にとっては目まぐるしい変化だったと思います。

そしてこのモダン都市は、日本国内のみならず世界中を同時的にコミュニケーションするのでした。この頃世界的なものとなったパリ・ファッション、特にシャネルが人気で一世を風靡。ご存知、パリコレもこの頃から定期的開催されるようになりました。そんなパリで発表されたモードが、ニューヨークや東京に同時的に伝えられ、これから登場するモダンガール（略してモガ）に影響を与えました。

さあ、ではそのモガにふれていきましょう。一昔前までは考えられなかった女性の社会進出も、女子教育の普及とともに女学生の中から育ってきたエリート的な「新しい女」とも言うべき人達が現れました。

デパート系では「リフトガール」。何をやる人でしょう？エレベーターガールのことです。それに「ショップガール」。そのままですね、売り場の店員さん。「マネキンガール」、これ、わかります？これはマネキンの役、ファッションモデルを兼ねた販売員だったそうです。綺麗でスタイルが良くないとなれなかったのでしょうか・・・。

それに「バスガール」、バスの車掌さんですね。デパートガールに次いで雇用条件が良かったそうです。そして、それ以上に破格の給料を取ったのは・・・？「エアガール」、キャビンアテンダントのことです。昭和6年の採用は、応募者140名に対してたったの3名。飛行機での移動はまだ一般的ではなかったのでしょうか。超狭き門ですね。そんなエアガールの給料は諸手当を含めて120円以上。大学卒の男子サラリーマンの給料の倍ほどだったそうです（※補足2）。

などなど。これらのように - 時には“からかい”にも - 用いられた“〇〇ガール”と称されたモダンガールたちは最先端の女性達で、彼女たちは洋装をいち早く取り入れ、また和装においても新しい意匠の着物を着こなした人達でもありました。今迄の良妻賢母という家庭に閉じこめられた女性像から解放されて、自らの意志で社会に進出した女性、モガ。新しい時代を象徴するイメージとして多くの女性たちからは羨望の眼差しを集めます。また、それと同時に、封建的な価値観を持った人々（特に年配者でしょうか？）からは「西洋かぶれ」、「はねっかえりの女」、「あんな女は嫁入り先もない」などと悪口をいわれることもしばしばありました。羨望（せんぼう）と侮蔑、二つの相反する感情がモガに向けられました。それだけ、モダンガールは社会のなかで一際目立った存在だったのです。

一部の侮蔑も物ともせずモガ達は思いっきりお洒落を楽しみました。当時の斬新な色柄の着物を纏い、新しい着物の担い手と同時に、モデルとなって風俗美術に興味のあった諸画家に描かれました。

激しいデザインや色使い、大胆な新しい趣向を凝らした着物は、必ずしも趣味のよいものばかりではなかったようですが、モダンガールたちは、技法と意匠の可能性が極限まで追求された着物を好み、後世になって昭和モダンと呼ばれる独特な雰囲気を持つ着物の担い手にもなったのです。

### （※補足2）

昭和6年（1931年）の物価

日雇い労働者：1円43銭　ビール：35銭　たばこ（ゴールデンバット）：7銭

葉書：1銭5厘　新聞購読料（1か月）：90銭　映画：40銭

パーマメント：20円　理髪：40銭

デパートの食堂

（定食：50銭　ビフテキ：80銭　ライスカレー：20銭　ざるそば：13銭）

□サンプル作品 大正ロマン、昭和モダン



大正～昭和初期の御召と銘仙、そして小紋（やわらかもの）です。ちょっとくせのある色柄のものを選んでみました。何れも普段着からちょっとした所へのお洒落着です。

どれが銘仙でどれが御召か判りますか？画像では少し判りにくいかな。でも、小紋はすぐにわかりますね？（31・36）。言うまでもないと思いますが、染物は白生地に自由に柄を付けていく後染め。対して御召（33・34）と銘仙（32・35）は織なので先染めです。織りながら模様ができるので、どうしても柄が硬いイメージになるのが特色です。御召の生産地は京都。銘仙は関東の伊勢崎、秩父、桐生、足利八王子など広い範囲で作られ、西の御召、東の銘仙と言われました。

銘仙は首都、東京に近かったことなのでしょう、時代の先端を行くモダンデザインをいち早く取り入れて大流行しました。御召より銘仙の方が圧倒的に面白い柄が多いです。そしてやはり京都は伝統を重んじる気質だからか、あまり冒険ができなかったのでしょうか・・・。

これもはっきりとした定義は無いのですが、このようにちょっと爆発気味の色柄、雰囲気のあるものを“昭和モダン”の着物と呼んでいます。第一次大戦の軍需景気も東の間、関東大震災などの影響も有り、日本は不景気になります。それにアメリカ発の世界大恐慌が追い討ち

をかけ、「もう、どうにでもなれ！」というような風潮が世の中を覆います。このようなデザインが生まれた背景の一つの要因だと考えられます。

では、昭和の初めの着物は全部が激しいものばかりかと思われるかもしれませんが、そうではありません。ご安心下さい。大正ロマンの流れを引き継いだ上品な着物もたくさんありました。まずは振袖の流れをおさえておきましょう。



(41) 大正の雰囲気そのまま残った振袖です。(42) そして文様が全面に付けられるようになります。(43) はちょっと爆発気味で、昭和モダン系といえます。

次にこの時代にだけ見られる散歩着という着物を紹介しましょう(先程の(16)も散歩着でした)。現在、付け下げという着物がありますが、当時はありませんでした。散歩着は付け下げの前身的存在ではないかと言われています。



このように一見背後から見ると小紋感覚のお洒落着かなと思うのですが、裾に絵羽柄を置くことによって、ちょっとよそ行きでも着用できるようにしてあります。

(44) ダリアの模様、洋花にモダンな柄が付けられた大正時代の作品。(45) 暈しが美しい菊尽くしの作品と(46) アールデコ調のチューリップが印象的な作品は、何れも昭和初期。また、(44・45)はロマン系、(46)はモダン系と言えます。

このように必ずしも大正にできているものが大正ロマン、昭和にできているものが昭和モダンと区別するのではなく、雰囲気による感覚です。はっきりとした定義はないので、人によっては判断がわかるものもありますが、あくまでも見た感じで捉えて下さい。

## 洋装化への波

大正12年(1923年)に起こった関東大震災を契機に男性に比べ遅れていた女性の洋装化が進みます。震災の時、洋服を着ていた人の方が逃げやすくて助かった人が多かったなどと言われたりもしますが、根本的には人々の生活スタイルの変化が原因でした。震災後続々と建てられた洋風モダンな住宅で、それまで畳に座る生活から椅子に掛ける生活へと変化していったからです。

女学校でも洋装の制服が次々と採用されていきます。中でも、既に明治末期に運動着として取り入れられていたセーラー服を、正式な通学用の制服として採用する学校が増え、昭和の初めには大半となりました。また洋装化と並行して、髪形も庇(ひさし)髪からお下げ、ボブスタイルなどの断髪へと変わっていきました。洋服の着やすさと動きやすい断髪は働く女性たち中に浸透していき、一般の女性たちの間にも“洋服を着たい”気分が広まっていくのでした。

呉服店はデパートへと変わっていきます。高島屋を例にみると、もともと飯田呉服店という呉服屋から始まった百貨店の高島屋は、大正8年(1919年)に株式会社化して株式会社高島屋呉服店という名称になりました。しかしその11年後の昭和5年(1930年)には株式会社高島屋と、また社名を変更しています。たった11年の間で呉服の取扱量が急激に減り、呉服店というイメージがそぐわなくなったという環境の変化を感じることができます。

そのような洋装化の波の中にいた呉服屋さん、着物製作に携わる人々は、先行きに非常に強い危機感を抱いたことでしょうか……。洋服に負けるなという思いで、デザインのにも技術的にも今までの枠組みにとらわれない着物が作られました。その斬新さが新人種モガ達の需要とピッタリと合致したのでしょう。一気に着物のバラエティーが広がります。

また、この時代は手仕事における「技術」にも恵まれていました。着物しか着るものがなかった時代に切磋琢磨し競い合った筋金入りの製作技術がしっかりと伝承できる状況にあったからです。それに大気汚染や酸性雨といった環境破壊の影響を受けていないピュアな絹糸。それら、すなわち「豊富な色柄」「高い技術」「素材の良さ」。これら好条件を持ち合わせて、洋服に対抗したこの時代(大正ロマン、昭和モダンの時代)が、日本の服飾史上、着物が一番輝いていた時代ではないかと私は思います。

では、もう一度近代の服飾の流れを整理しましょう。明治時代は江戸時代の流れを受けて渋いトーンを引継ぎました。そして徐々に華やかになっていきます。洋風的な趣向も取り入れられながら“大正ロマン”という雰囲気を作り、一部、“昭和モダン”で弾けるといった感じですが、しかし花の命は短し、昭和7年に満州事変、五・一五事件がおこると日本は泥沼の戦争モードに突入します。昭和13年（1938年）には米、砂糖をはじめ衣類まで配給制となると、もはや手の込んだものは作れなくなるのでした。

## そして現代へ

温故知新という言葉があります。「故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知る」です。昔の着物から学ぶことは大変多いです。着物製作携わっている人々などは常に昔の着物を参考にされています。

これもまた、温故知新といえるでしょう。古着となった昔の着物を、現代に上手く利用して自由に選んで着ています。ある人は現代の着物には無い色やデザインを求めて、また、ある人は今ではとてもできないような手仕事や素材の良さを求めて……。

着方も今では結構自由になってきていますが、私はそれでいいと思います。モダンな人たちも、「外国人が物好きに着物を着た」ように、自由に着こなしていました。それは、現代の着付け教室で教えられるような「堅苦しい模範的な着付け方」とはひと味違う、生き生きとした感覚だったに違いありません。確かに結婚式など礼装用、フォーマルな場面としての着用には最低限度守らなければならないルールもあり、気を付けなければいけませんが、それ以外でしたら洋服を着て遊びに行くのと同じ、基本的に自由でいいのです。着物離れを進める要因は、着物というだけであまりにも難しく考え過ぎて、窮屈なイメージを抱く人が多いからだと思います。

気楽に着物を着る機会をたくさんつくって、みなさん、着物を楽しんでみて下さい。

□参考画像



中央大通路の両側のパビリオンを飾るイルミネーション。街中ではまだガス灯が優位だったところ、電気装飾は電気の到来を告げた（『電燈』から）

（朝日クロニクル週刊 20世紀 1902-3 朝日新聞社 P.37）

明治36年、大通りのイルミネーション。街中ではまだガス灯が優位だった頃、電気装飾が新しい時代の到来を告げていました。まだみんな髷を結っています。娘さんの着物は、地味路線から抜け出そうとしている過程の着物と言えます。既婚者の方、右二人は小紋を着ています。中程には洋服姿に帽子を被る男性と海老茶袴の女学生が見られます。



（決定版 昭和史 2：「昭和前史・富国強兵」毎日新聞社 P.92 / 3：「昭和前史・日露戦争」 P.103・P.99）

(左) 束髪にリボン、袴が明治女学生の定番スタイルでした。中には、背中まで長く垂らした束髪くずしも愛好されたとあります (中)。正装の時などには、前髪を高く膨らませた底髪が一般化しました。中にあんこを入れてふくらませています (右)。



(決定版 昭和史 4:「昭和前史・関東大震災」毎日新聞社 P.166)

とても面白いです。左の写真は大正10年、大阪府立愛日小学校1年生女子組のクラス写真。洋服の生徒は僅か2名。うち1人は洋服屋さんの娘さんだそうです。

そのクラスが5年生になった時の写真が右。着物の生徒は1人だけという変わりようです。幼少の子供ほど、洋装化は早く進みました。



← 和歌山県橋本高等女学校の野球部。和服のユニフォームにモダンなぼうしが目を惹きます。大正時代。

(決定版昭和史 4:「昭和前史・関東大震災」毎日新聞社 P.157)



← 不忍池でボート遊びをする袴姿の女学生。女性が戸外で楽しむのもこの頃からで、夏の海岸などは海水浴の少女たちも見られたとあります。

(日本歴史シリーズ20 「大正デモクラシー」世界文化社 P.138)



(朝日クロニクル週刊 20 世紀 1926 朝日新聞社 P.9)

大正 9 年の東京目白のアパート。畳とちゃぶ台からイスとテーブルの生活に変わろうと  
 しています。大正 1 2 年の関東大震災は、モダン都市の形成を一気に加速させました。



(決定版昭和史 4:「昭和前史・関東大震災」毎日新聞社 P.154・P.157)

”耳隠し”は大正のおわり頃から流行したといわれるヘアスタイル。耳隠しで羽子板を  
 する娘さん(左)と着物での合奏風景(右・大正 1 2 年)。耳隠しは和装でも洋装でも合う  
 とのこと。



大正10年のデパートガール。三越呉服店の制服だそうです。生地は木綿で紫紺の無地。働きやすいこと以外に、お客さんとの区別をつけるねらいもありました。

(朝日クロニクル週刊 20世紀 1921-2 朝日新聞社 P.31)



(決定版昭和史 4:「昭和前史・関東大震災」毎日新聞社 P.152)

(左) タイピストガール。大正4年の和文タイプの発明以来タイピストの養成も盛んになり、女子のかっこうの職業として普及。(大正11年) (右) カフェガール。この頃のカフェとは現在でいうクラブ、すなわちホステスさんです。(大正14年)



“モダンボーイ”に“モダンガール”。ダンスホールやカフェに出入りするその服装が流行をリードした。最先端の華やかさは、街のイメージをかえていく。それは自由で新しい考え方を象徴するスタイルでもあった。

← 劇作家で舞台美術の家の村山共知義とその夫人。村山氏は築地小劇場などの舞台装置で評判を呼び、暮らしぶりもモダンの典型と言われた。(昭和2年頃)

(朝日クロニクル週刊 20世紀 1927-8 朝日新聞社 P.16)



← モダンガールの定番スタイルは「断髪に帽子、洋装、引眉毛」。アメリカ映画などから取り入れて、銀座の街を誇らしげに歩きました。日本女性が膝丈スカートで膝小僧をさらす姿に世間は大きなショックを受けたそうです。

(決定版昭和史 5:「昭和前史・昭和の幕開く」毎日新聞社 P.99)



← 立ち食いそばをすするモガ、女性が公衆の面前で立ち食いをするなど以前には考えられないことだったと・・・。

(朝日クロニクル週刊 20世紀 1927-8 朝日新聞社 P.16)

断髪に着物。こんな和洋折衷ファッションも流行りました。モガは洋装だけでなく、和装においても新しい意匠の着物を着こなした人達でもありました。



(左：NHK知るを楽しむ 歴史に好奇心'07 2月3月号日本放送出版協会 P.112)

(右：日本歴史シリーズ20 「大正デモクラシー」世界文化社 P.132)



(決定版昭和史 7:「昭和前史・二・二六事件前後」毎日新聞社 P.116・P.117)

昭和10年のデパートガール。大阪高島屋の出勤風景とタイムレコーダを押す風景。元々呉服店からでしょうか？着物で通勤している人が多いです。デパートガールには身元の確かな、いい所のお嬢さんが採用されました。



(決定版昭和史 7:「昭和前史・二・二六事件前後」毎日新聞社 P.112・P.113)

(左)エアガールことキャビンアテンダントの採用試験風景。昭和6年に初登場して以来、エアガールは女性のあこがれの職業に。(右)空に負けじと船旅にもマリンガールが誕生。粋な水兵服は軽やかで動きやすくいかにも先端をいく職業にふさわしかったようです。(どちらも昭和11年)



← (右) 東京市営バス車掌と青バス(東京乗合自動車)車掌と(左)市電の女性車掌。ラッシュアワーにステップに立つ重労働のため、月経不順などの健康問題も起きました。(昭和12年)

(朝日クロニクル週刊 20世紀 1937 朝日新聞社 P.22)



(朝日クロニクル週刊 20世紀 1940 朝日新聞社 P.4 / 1943 P.27)(写真に見る昭和史 2007年4月29日読売新聞より)

(左) 昭和15年、日中戦争勃発3周年を期して国家総動員法に基づく「不急不要品、奢侈贅沢品、規格外品の製造加工ならびに販売禁止」が全国で一斉に行われた。染め絵羽模様の羽織、襦袢、夜具、指輪、腕輪、首輪、ネクタイピン、象牙製品は値段にかかわらず禁止。注文の背広は冬服、合服 130 円、夏服 100 円、婦人服は注文品 100 円までというように、こと細かく規制されました。これを「七七禁令」という。

(中) 衣料資源の節約から男は戦闘帽に国民服、女はモンペ姿など動きやすい服装が政府から奨励されました。(昭和18年)

(右) 昭和19年、終戦の前年です。大日本婦人会が「決戦です。すぐお袖を切って下さい。」と書かれたカードを配って、長袖追放運動を始めました。これによって派手な着物姿は街から消えていきました。